

交流の冬、喜多方Pは眠らず

新しいコラボレーションに向けて

M2 鄭一止 (イルジ)

2006年度喜多方プロジェクトの活動としては、主に景観協定締結のための基礎調査・条文検討・景観ワークショップのサポート、そしてまちづくり塾のサポートを中心に、またOBOG会 (3月11日) などを行ってきた。今月 (3月) を中心にちょっと幅広い地域の人々との連携ができたので、それを紹介したいと思う。

左/ヤマガタ蔵プロジェクトと
のまち歩き

●三春町・船引町を訪問

次に三春まちづくり研究会による勉強会に、喜多方地元の方とともに講師として呼ばれたことについてである。元々喜多方建設事務所に勤めていた芳賀英次さんとは3年くらい前からつながりがあったわけだが、去年から三春町に移ったことで、このような喜多方と三春とのコラボレーションが企画されたのである。三春町は、喜多方市内から東に約50km離れている小さな町であり、最近景観条例が結ばれ、中央通りの拡幅整備とともに、道沿いの建物が条例に沿って、建て替えられたりして、ハード的にはまさに今がまちづくりの頂点であった。このような三春の中心市街地を实际歩いて、地元の方の前で喜多方でのまちづくり活動について紹介し、意見交換することが一日の日程であった。また次の日には隣のまち、船引町に行って同じスケジュールでまちを回り、地元の方と話し合った。

二つのまちを歩き回り、地元からの説明を聞きながら、感じたのはやはり両方のまちも、それなりに貴重な資源をもっていることであった。しかし、それを自分の地域のプライドとして考え、まちづくりに実際参加したり、このような資源を活かそうとしている地元の方は少なく、ちょっともったいない気もした。

それにしても、まちづくりに熱心である喜多方地元とともに、山形・三春・船引の地元の方々と話合いができたこと自体が大きな収穫だったと思う。ひいてはいろんな形でのコラボレーションの契機にもなるのであろう。

●ヤマガタ蔵プロジェクトの来喜

まず、ヤマガタ蔵プロジェクトの来喜多方についてである。3月5日、蔵に着目し、蔵見学会、空き蔵の活用イベントなどを中心に活動している東北芸術工科大学のサークルであるヤマガタ蔵プロジェクトの学生たちや山形の蔵持主の方などを含め、12名が喜多方を訪ねた。このようにきゃびきゃびしている若者と地元の方との喜多方蔵めぐりツアーはとにかく楽しかった。日常生活の中に馴染みこんでいる喜多方人の蔵との生活を見せたかったので、蔵座敷・店蔵・倉庫など様々な用途として使われている蔵や周辺集落などを案内したが、特に嶋新さんの70m長さの倉庫蔵や三津谷の登り窯などに対する彼らの大リアクションは活き活きしていて、案内している立場としても本当に嬉しかった。一方ほかほか暖かかった天気の中、まちをブラブラ歩きながらも、山形の蔵と比べながら説明を聞いたりする姿は慎重であり、真面目な印象も受けた。

夜の喜多方の地元との交流会では、蔵やまちに対する思い、実際の蔵の活用やまちづくりの状況などについての議論は、本当に熱かった。蔵の持ち主を中心とした、喜多方・山形・三春の蔵ネットワークの話も出た。でもさすがまちづくりに対する地元の熱意は、喜多方にやや分があるかも…



左/三春町の蔵

右/船引町の蔵とのれん

「都市空間の構想力」連載第2回

今3月発行の『季刊まちづくり』に、西村教授主宰の連載「都市空間の構想力 空間の博物学・東京」第2回が掲載。「地形」がテーマの第2回は、西村リード文に続いて、「坂の連なりが一体の地域を浮かび上がらせる」「谷あいと高台が相俟って体を成す」「兩岸を分かつ深谷が地域を束ねる」の3本立て。日ごろのまちあるきから得られた「構想力」が、豊富な事例で語られている。

構想力チームでは目下、次回テーマ「みち」に向けて最終原稿を執筆中。次回以降への参加者も、ひろく募集中だ。「新宿を除く他プロジェクトでは同チームになることのない中島、野原両助手が参加するミーティングでは、貴重な両者の激論を目のあたりにすることができる。今のM1、4月からの新M1にも、気軽に参加してもらいたいね」と中島伸D1。

※図は「坂」より引用

text_banna

中井地域

去る2月18日から26日まで、インドネシアの古都ジョグジャカルタの郊外のコタグデというまちを舞台に開催された、

4th International Field School on Asian Heritageにファシリテーターの一人として参加してきました。このフィールドスクールは、昨年、西村先生のもとで博士論文を書かれたマレーシア工科大学のアイディット先生がコーディネーターを務められており、今回はインドネシア、マレーシア、タイの各国から総勢30名近い参加者がありました（残念ながら日本からの学生はいませんでした）。コタグデはジョグジャカルタの中でも特に歴史的環境が良く残っている町ですが、昨年5月のジャワ島中部地震で大きな被害を受けて、現在、その復興に取り組んでいるところです。今回のフィールドスクールでも、1班activity planning、2班design guideline、3班district design、4班land use、5班economic planning、6班organization and managementに分かれて、歴史的市街地の復興まちづくりをテーマに提案を練りました。

学生たちはまちなかの大きなゲストハウスに全員で宿泊し、そこを作業場として一週間集中して提案づくりに取り組みました。

フィールドスクールの参加者たち



プンドポと呼ばれる半屋外のジャワ島伝統建築

印象的だったのは節目節目で行った、近隣のコミュニティの集会所での地元の方々を招いての発表会です。インドネシアでは「ゴトン・ヨロン」と呼ばれる自発的相互扶助の伝統が尊ばれており、地域コミュニティの自治が健在です。地元住民の方々は今回の各発表に熱心に耳を傾けていました。その様子は日本のまちづくりの現場を想起させるものでした。

また、会期中には、ジョグジャカルタのガジャマダ大学にて復興まちづくりに関する国際シンポジウムも開催されました。日本からは西村先生、城所先生も参加され、私も末席を汚して、研究室で取り組んでいる八尾のまちづくりを事例に伝統文化がまちづくりに果たす役割について発表しました。ここでもフロアから「最初にコミュニティに入るときの工夫は？」といった質問を頂くなど、住民の方々との協働のまちづくりに対する関心の高さを実感させられました。

次回は来年、台湾で開催されるそうです。ネットワークづくりは勿論、自分たちの研究や研究室のまちづくりプロジェクトをアジアの共通文脈で捉えなおす良い機会になると思います。研究室のメンバーの参加を期待しています。

研究室・人口爆発警報発令！ 空前の過密時代到来、問われるM2結束力の真価

text_bannai

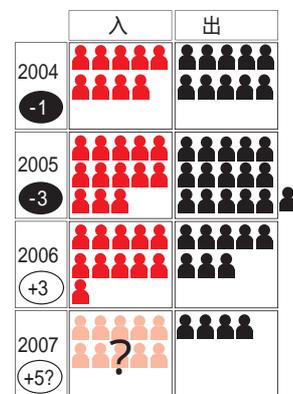
新年度を間近に控えて、人口問題という危機が、ひたひたと研究室に忍び寄っている。原因は、例年10人前後で安定している入学者に比べて、来年度は修了して外へ出る人数が圧倒的に少ないことだ（凶）。今年度より、9階、10階に2階を加えた3フロア体制となって過密は一定で緩和されたが、来年度に予想される4～6人の増員を、どのように吸収するのかについては、明確な方針が打ち出されていないのが現状だ。

今年度を迎えるにあたって、新M2（当時）の2、9階への「分断」が問題化した（本誌25号参照）。ドクター院生の増加から、「修士同学年は同フロア」という原則が崩れて、新M2の陳情が相次いだ。結局は、新M2はクジ引きで行き先を決めることとなった。今年度は、その問題が拡大・再燃化することになる。

新M1が全員9階に入るという慣習は、研究室環境への順応の観点から、ほぼ確定的と言ってよいだろう。それをふまえると、今年度と同様に、新M2が10、2階に散る（ドクター先住権尊重路線）新M2が10階に平行移動して、10階から溢れたドクター院生が2階に降りる（M2集団維持尊重路線）新M2、2、10階先住院生が全員で希望を出し合って、席再編を行う（学年差解体混住化路線）といった3つのオプションが考えられるが、は移動手間等を考

えるといささか現実感を欠くため、かとなるだろう。端的に言えば、新M2とドクター院生の綱引きとしての様相を呈することになる。

まずは、個々人の意思とともに、集団としての意思がどのようなものであるのか、を確認することから始めるべきだろう。特に、9階を追われることが確定的なM2は、10階への集団移動を欲するのか、しないのか、をはっきりさせるべきだ。欲する場合は、M2がフロアを同じくすることのメリットについてきちんと説明した上で、それがドクター院生移動というコストを補って余りあることを示さねばなるまい。2階をふくめた3フロアが、早急に代表者を決めて、席割の原則について確認することが急務だ。「決まっていることは仕方がない」という安易な現状肯定を振り捨て、「仲がいいから一緒にいたい」という感情論を乗り越えた席替え理論を提示して、要求実現のための運動を行っていくことができるのか。これまで、プロジェクトにおいて、また、誕生会の定例化や研究室旅行、今年度の追いコンなど、エンターテインメント方面において、卓抜な結束力を示してきた新M1、彼らにとって試金石というべき課題だ。



研究室に入る人数・出る人数の推移

編集後記

text_bannai

「正門付近では自転車・バイクを押して歩いて、先ごろ行われた試験運用、言い分はもっとも、不便も僅かだから言うことは聞こう。しかし、雇われガードマンが仁王のように門のかたわらに立つキャンパスには、やはり違和感、拒否感が拭えない。登山子でも置いてくれた方が、よっぽど気が利いているのに。」